

◆明るいニュースのない昨今だが、みなさんの原稿がそろって安堵している。それぞれが目の前の現実に向かい、作品や文章にしているのを見ると、逆に編集部が励まされているような気がする。ありがたい思いとともに、なにか生きるための太いものを感じさせてくれるのだ。さて、〈スイスからの便り〉のギンジツク恭子さんのエッセイは今回で終わりとなる。スイスと日本の架け橋の組織で理事の活動などもあり、忙しい様子だ。残念ではあるが、「展景」に外国の風を運んでくれたことに感謝している。

◆東京で最初に住んだのは杉並区だった。だいぶ昔のことである。私鉄沿線で、静かな住宅街の奥には畑が残っていた。六畳一間のアパートには小さな流しが付き、トイレは共同、風呂はなくお風呂屋さんに通うのだが、すぐ前の八百屋で果物の値段を見たときは忘れられない。山形では果物は親戚や知人にもらうのが当たり前だったから、東京のは高過ぎてカルチャーショックを受けたのだ。もう一つ覚えているのは、金木犀の香りである。その当時、ふる里にはない木だと思い、自分の記憶として杉並の住宅街とがちり結びついたのだった。

いま娘の家族が杉並区に住んでおり、保育園に入れない筆頭として杉並区が挙げられるなど、無関心ではられない。そんな折、杉並区の区長選挙に新人の女性が立候補していることを知り、注目していた。選挙の結果、なんと僅差で現職を破ったのだ。新区長となった岸本聡子さんは、オランダ・アムステルダムに拠点がある政策研究非政府組織（NGO）「トランスナショナル研究所」の研究者として働いてきたという。結婚や子育てをしたのはオランダやベルギーで、いつか日本のために働きたいと、このたび単身で帰国したようだ。著書に『水道、再び公営化！ 欧州・水の闘いから日本が学ぶこと』（集英社新書、二〇二〇年）がある。選挙のときの本人の弁も素晴らしいし、支持した周りの人たちの応援もよかった。その後なにかと注目されているが、区議会との関係は今後の大きな課題だろう。彼女の支持者たちは議会を傍聴に行っているし、区も積極的に議会のネット配信を行っている。すべて順調にいくことはないにしても、岸本区政を成功に導くという周りの人の意志を感じる。遠く離れた山形からみたいへん期待しているところである。

〈おすすすめ本〉

・『私がつかんだコモンと民主主義 日本人女性移民、ヨーロッパのNGOで働く』（岸本聡子、晶文社、二〇二二年七月）

・『第三次世界大戦はもう始まっている』（エマニユエル・トッド、文春新書、二〇二二年六月）

・『掃除道入門 ところを磨く、世界を磨く掃除の教え』（松本紹圭、ディスカヴァー・トゥエンティワン、二〇一九年）

（布宮慈子）

# muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。  
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊 展景  
107号

二〇二二年十月三十一日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一七―二〇二

[info@muninokai.com](mailto:info@muninokai.com)